

皆さんは、『金富士』という飲み屋をご存じないだろうか。南 6 西 3 の北専プラザ佐野ビル(昔は北専会館と呼んでいた)の地下 1 階にある。

私がこの店と出会ったのは、今から 40 年前にさかのぼる。

1975 年(昭和 50 年)4 月、浪人生活から解放されて楽しいキャンパスライフを送ろうとしていた時、まだ出会ってすぐのクラスの仲間 3 人でススキノに出ることになった。3 人のうち私ともう 1 人は自宅生であり、あと 1 人は大阪からやってきた男であった。その大阪の男に「ススキノで安い店を見つけたから行こう。」と誘われたのが、この金富士であった(大阪人の嗅覚はすごい)。



金富士の入口

札幌在住といえど、大学に入ったばかりでススキノの店など知っているわけもなく、また、今のようにはチェーン店などない時代。『ここが焼鳥屋、居酒屋と言われるところなのだ。』といたく感動したのを覚えている。

当時の記憶なので定かではないが、お酒が一級酒 100 円、二級酒 80 円(焼酎は 60 円、おそらく)だったと思う。そして、この店で一番高いメニューが

ビールの 200 円(飲み物だけでなく全メニューで)だったのではないだろうか。一人で 500 円飲むのが大変だった。

当時も今も店の作りは変わっておらず、カウンターに 10 席、4 人掛けテーブルが 4 卓、奥の小上がりに 12、3 人座れて、満員になっても 40 人程度しか入られない店である。

白髪のおじいさんが焼き鳥を焼き、そのおかみさんと息子 2 人の一家 4 人で切り盛りする家内制居酒屋であった。客層はといえば、一日の仕事を終え作業服に身を包んだ労働者風の人が多く、何とも大学 1 年生にとってはあまり居心地のよい店ではなかった。

カウンターは 1 人でやってきた人が多く、焼酎を飲みながら競馬新聞やマンガ、週刊誌を読む人、物思いにふける人など、ひとときの安らぎを求める場所であった。カウンターに座る人は決して隣の人や焼き鳥を焼いている『とうさん』にも話しかけない。ただ、ひたすら自分の時間に没頭する。たまにこの空気がわからず、隣の人に話かけたりする人がいても周りの沈黙がそれを押しつぶした。また、とうさんに酒を勧めても決して受け取らないのだが、焼き台のそばにはコップに入った自分専用の酒がいつもおいてあった。

このとうさんが、金富士を開いたのは 1953 年(昭和 28 年)のことである。店名は札幌で当時「金富士」という銘柄の日本酒を造っていた蔵元の直営店だったことから命名したとのこと。しかし、この会社は 1968 年(昭和 43 年)頃に廃業したため、それ以後は旭川の蔵元「男山」を使っている。現在の場所には 1966 年(昭和 41 年)に移転し、二代目が継

いだのは 1988 年(昭和 63 年)のこと。

二代目も現在はリタイヤーして今は三代目が引き継いでいる。そして、二代目の実弟が三代目を見守りながら女性店員 3 人と店を切り盛りしている。

さて、とうさんの時代からの習わしとなっている金富士の名物は、日本酒・焼酎(最初の 1 本はビールでも可)を頼むとお銚子 3 本までつまみがつくのである。1 本目は日替わり、2 本目はミニ冷や奴、3 本目は漬け物。つまり、飲み代だけで 3 種類のつまみを楽しめるというわけだ。もちろん、お通し代なんてない。



最初のお通し(上)と 2 回目、3 回目のお通し

この名物は、熱々でふわふわの卵焼き。あとは、身欠き鯿、たこ刺し、ポテトサラダ、焼き鳥も各種ある。

ここを訪れるときは基本的に一人。誰と話すわけでもなく、夏の間はナイター中継をみることもあるが、たいていは一人で何とも楽しい時間を過ごすことができる。まさに、40 年通い続ける私の『隠れ家』である。

しかし、最近といってもかなり前からであるが困ったことがある。それは、混んでいてなかなか入



名物「卵焼き」

れないことだ。

昔と違って今は女子学生や OL のグループ、時には女性が 1 人でカウンターに座って日本酒を傾けている姿も珍しくない。男同士、女同士、カップルでもう大繁盛なのである。

そんな状態なので、ここでは相席が常識。4 人掛けのテーブルに 2 人で座っているときに 1 人のお客さんがカウンターに座れない時には「相席をお願いします。」となる。相席を拒否することはタブー。

テーブルに若いカップルが向かい合って談笑しているところに相席するのは何とも野暮な話であるが、どうしてもここで飲みたいときは相席をして、早くカウンターが空いてくれるのをただひたすら待つのである。

テーブルと小上がりは予約できるようだが、カウンターの予約は不可とのこと。また、テーブルを予約して彼女を誘っても相席の可能性があるので忘れなく。

もうこれ以上混んで欲しくないので皆さんに紹介したくないのだが、40 年通ったことを話したくて書いた次第である。

吉 野 大 仁(よしの だいじん)
技術士(建設/水産/総合技術監理部門)

株式会社ドーコン

